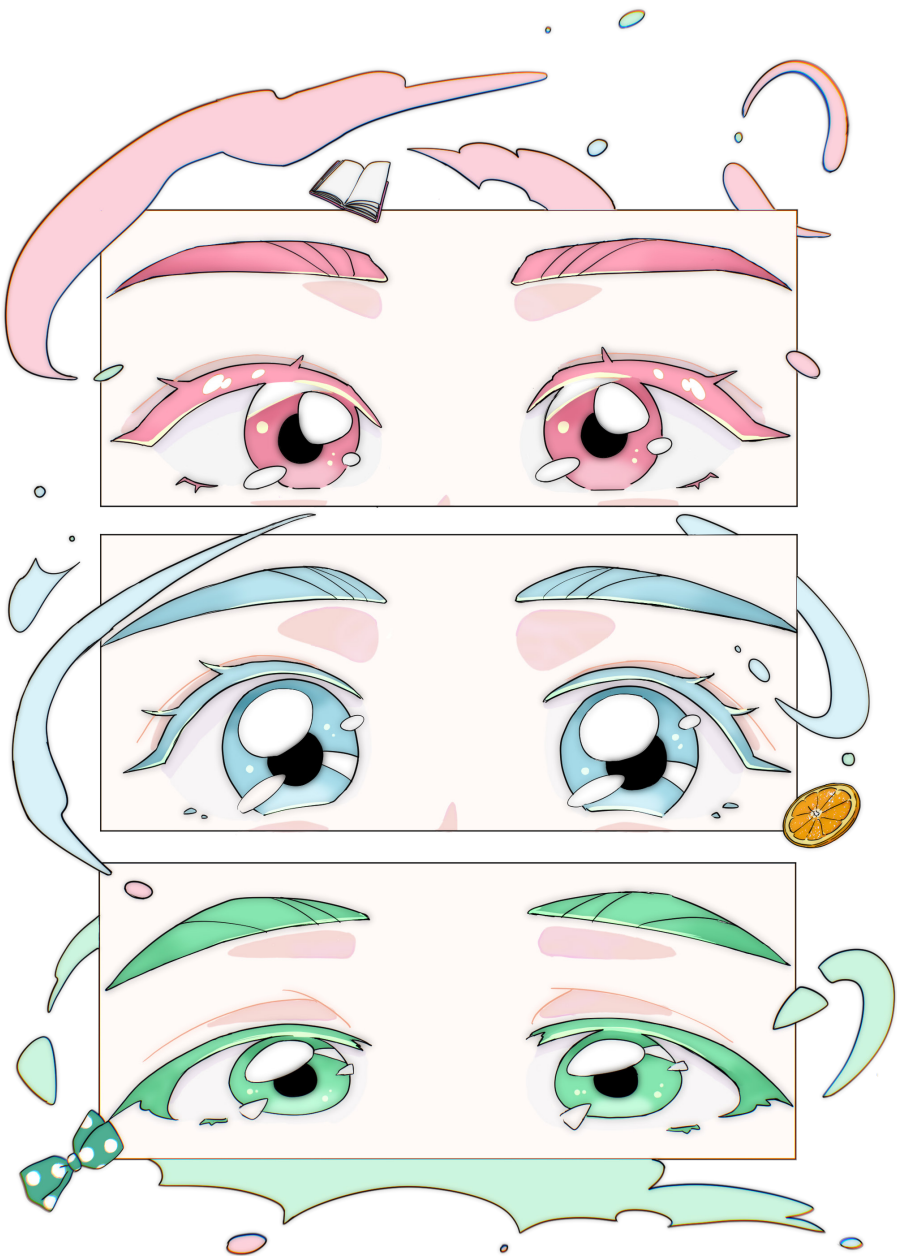




RYUTist
FAN liner notes
GIRLS be still **ALIVE**

はじめに / メンバー紹介	...1p-2p
RYUTist HOME LIVE	...3p-4p
日本海夕日ライン	...5p-6p
柳都芸妓	...7p-8p
ファルセット	...9p-10p
(エン)	...11p-12p
RYUTist 2023-2024	...13p-14p
あとがき	...15p-16p

はじめに

皆様こんにちは、ライナーノーツ「GIRLS be still ALIVE」をお手に取って頂き誠に有難うございます。
僕達は今までRYUTistさんや関わって来られたスタッフの皆様本当に心から感謝してます。
と同時に作詞作曲家編曲家の方々が魂を込めて作られた一曲一曲に敬意を払ってます。
今後も名盤に出会う方々のお力添えが少しでも出来ればと思い、ライナーノーツの作成をさせて頂きました。
これからも素晴らしい名曲達が僕等が辛い時や悲しい時、嬉しい時や楽しい時、いつも側で寄り添ってくれる事を信じて。

RYUTist について

新潟市・古町の活性化を目指し、新潟県内で専門学校を展開するNSGカレッジリーグ系列の「SHOW! 国際音楽エンタテイメント専門学校」がオーディションを開催し結成された。主に同校併設、隣接のライブハウス 新潟SHOW!CASE!及び柳都SHOW!CASEにて定期的に「HOME LIVE」を行っていた。

グループ名は「柳都(=新潟市)」という言葉に「アーティスト」を加えたもので、「新潟のアーティスト」というような意味である。また、「新潟を大切に活動していきたい」という思いも込められている。

13年間の活動で県内外にて地域の祭りからスタジアムまでさまざまな場所でライブイベントに出演。大規模フェスや海を越え米国シアトルでのステージも経験。コロナ禍の2020年にはyoutubeで無観客野外生配信ライブ「ファルセットよ、響け。」を敢行し約2000人の同時接続数を記録。10周年となった2021年には念願だった新潟市民芸術文化会館りゅーとびあでのワンマンライブを成功させた。

メディアにも新潟県内を中心に多数のテレビラジオCMやキャンペーンPRキャラクターにも起用されレギュラーラジオ番組、情報バラエティなどさまざまな場で活躍。メンバーの卒業、加入を経て2024年渋谷CLUB QUATTROでの「RYUTist LAST HOME LIVE ありがとね、ほんとにね。」をもって五十嵐夢羽、宇野友恵、横山実都、全メンバーの卒業により、グループは無期限活動休止。

五十嵐夢羽 むうたん

2001年1月5日生まれ ダンスリーダー。メンバーカラーは緑。

優しく芯のある歌声でRYUTistの楽曲を支える。グループの癒しキャラとしての言動はメンバーとファンの五臓六腑に沁み渡った。むうたん推しで試練を越えたものだけが入門できる「わんぱく一門」が存在する。エビ中が大好き。劇団ムーでは主宰も務めた。



宇野友恵 ともちい

1999年4月1日生まれ ボーカルリーダー。メンバーカラーはピンク。

グループ内でも低身長ながらエモーションな歌声と迫力のあるダンスが特徴。オリジナルキャラの「いわ」をはじめ、イラストの制作やゲーム配信を行うなどクリエイター気質。チーム名は「ダチいず」。読書好きが高じてMikikiにてエッセイを連載した。13年間ライブ皆勤賞。



横山実郁 みくちゃん

2001年11月24日生まれ 最年少。メンバーカラーは水色。

RYUTistの妹分としてソロ活動を開始し、わっかーの卒業を機に途中加入。グループの元気印として、MCを中心にライブを牽引する。新潟のマルチタレントとして、番組やCMなど多方面で活躍中。ファンネームは「みくのもの」。SNSも駆使用するエゴサの鬼。



佐藤乃々子 のんの

1995年11月24日生まれ 元リーダー。メンバーカラーは黄色。

真面目で優しい性格の最年長として慕われた。初期のころからまだ幼かった他のメンバーを導くまとも役で、こごぞというときのコメントをビシッと決めてくれるなど、長い間グループの精神的な柱として活躍した。猫と戦隊ものが好き。2023年4月2日卒業。



大石若奈 わっかー

1999年7月17日生まれ メンバーカラーはパープル。

ダンスのキレは一級品。漂う気品に「若様」と呼ばれることも…でも意外と天然。進路のためRYUTistを第一に出来ないことへ想いが募り2016年4月17日卒業。パートを引き継ぐみくちゃんのため、発表～卒業までに全レパートリーのダンスの動画を撮りおろし託した。



木村優里 ゆりり

1995年11月3日生まれ メンバーカラーは赤。

明るくノリが良いムードメーカー。現場のノリ、いわゆるヲタ芸などにも馴染みがあったり、メンバーも不慣れな初期の現場では率先してファンとコミュニケーションを取った。卒業曲「リタルダンド」は2ndシングルに隠しトラックとして収録。2012年11月18日卒業。



RYUTist HOME LIVE



#1 / RYUTiswing take 2

アルバムの出だしでもあり、アルバムタイトル通りライブの開幕を告げるSE。全編にわたりボイスサンプリングを使用しており、前半の裏打ちスウィングパートから、後半の頭打ち4ビートに急速にシフトチェンジするのが特徴。

#2 / Zero and Perfect Moon～変わらない想い～

RYUTistを満ち欠けする月に喩えた曲。2013年8月、2周年記念ライブにて初披露されて以来、原則ホームライブのみでしか披露されておらず、初披露から2年越しで音源化された。

#3 / MC

ライブ開幕後、最初のMCでほぼ例外なく発せられる自己紹介をそのままパッケージングしている。なおMCのトラックは、ホームライブ会場にファンを招待したうえ、RYUTist楽曲上最も激しい「嵐は日曜日」を2回連続で披露した後に収録されている。

#4 / それはまた別の一日

3rdシングル収録の「チュララ」に続く、メンバーの4声コーラスワークが光る永井ルイプロデュース曲第2弾。シンセ、ハーブシコード、永井氏によるコーラスなど、永井節が随所で炸裂している。ライブにおける初披露は2014年11月。

#5 / ランファン

2015年4月初披露。ローカルテレビ局uxの企画のタイアップソングであり、割と早い時期に音源化がされていたが、今回のアルバムに収録され一般流通される運びとなった。爽快なメジャーコード感到、フルートが更なる軽やかなエッセンスを加える。

#6 / ハックルベリー

2014年8月発売の3rdシングル収録曲。「ランファン」同様サビから始まり、ファンクのエッセンスを含んだ軽快なリズム、ホーンセクションが非常にキャッチーな曲。RYUTistのライブでは1曲目に据えられることもある。

#7 / メクルメクルメ

2014年9月初披露。グロックンのような音色によるメインリフに合わせたフリが特徴的な楽曲（これは是非ともステージでご覧になっていただきたい）。アルバムの流れの中では折り返し地点のような役割を担っている。

#8 / Wind Chime!!～古町のトンネル～

2014年2月初披露。イントロから風が吹き抜けるようである3rdシングルタイトル曲とオケは同じだが、歌詞・フリ共に大きく異なる。主に新潟市中央区におけるイベントでのみ披露される特別バージョンである。

#9 / 太陽のシルエット

アルバム中の白眉であると呼んでも過言ではない、スラップベースとホーンセクションが存在感を放つファンク調の楽曲。サビに向け突き抜けるようにヴォーカルが明るくなっていく様は、まさにタイトル通り「太陽」のようである（#2とは対称的）。

#10 / 神話

イントロのメランコリックなピアノに被さるダンスビート、夜空を想起させるギターソロ、遠く離れた相手を想う歌詞等まさにキラーチューン要素満載。なお、#9・#10共にアルバム先行発売の4周年記念ライブにて初披露と、いわゆるアルバム曲である。

#11 / Bitter With The Sweet

2014年末初披露。それまでの楽曲群には存在しなかった、ストリングスをフィーチャーしたヘヴィ・バラード。勿論ヴォーカルのエモーション加減も半端ではない。ここからアルバムはラストへ向け急加速する。

#12 / Beat Goes On! ～約束の場所～

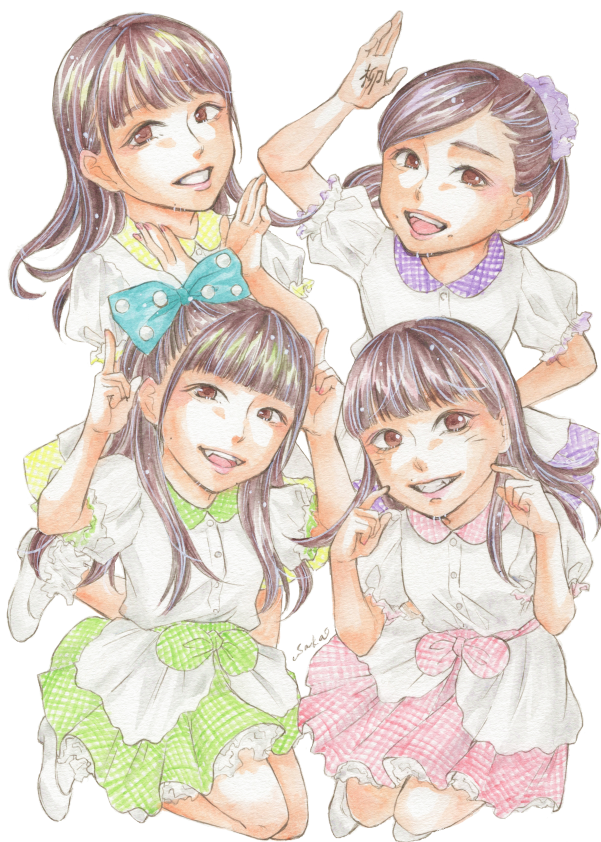
2011年11月初披露。初期より存在していた曲であるが、今回アルバムリリースに際し再録している。約7分と最大の尺を誇る楽曲であり人生讃歌。曲の構成も相まってライブでは最高潮の盛り上がりを見せる。

#13 / ラリリレル

RYUTist結成当初から存在する曲で、今回再録された。のんのが「これがないと終われない」、「(仮にステージ2曲として)ラリリレルとそれ以外」と語る(2015年錦糸町リライブにて)程の定番曲。2019年頃までのライブではほぼ例外なく最後に披露される。

#14 / MC

ライブの最終曲の終了後にほぼ例外なく行われる、ライブを締めるMC。ここでリードを取るのは最年少のむうたんで、この「ラリリレル、パハハハイ」を以てRYUTistのライブは終了する、いわゆるお約束。この作品はそれすら余さず収録している。



日本海タ日ライン

NIHONKAI
YUHI LINE



#1 / おはよう-ルート113

海岸に打ち寄せる波の音から始まり、オルガンのサウンドにメンバー4人のハミングが乗る、教会音楽のようなオーバーチュア。アルバムタイトルの『日本海タ日ライン』とは、新潟県の海岸線に沿って走る国道の通称でもある。そしてこの曲のタイトルにもある「ルート113」は、日本海タ日ラインのうち新潟県の北側(下越)のおよそ中間地点から新潟市まで続く国道113号線のこと。日本海の朝から夕方、夜までの情景を描いたコンセプトアルバムの幕開けである。

#2 / Morning light Sunshine

「サイドミラーを駆け抜けてく」といった歌詞の通り、朝の日差しの中、日本海タ日ラインをドライブする光景を歌っている。サビに入る「Wow Wow Wow」の部分は、トンネルの出口で一気に視界が開けて海が見えてくる瞬間が思い浮かぶよう。一方で、本アルバムはわっかー卒業&みくちゃん加入後最初にリリースされたアルバムでもある。爽やかでまぶしい情景を通して、別れの切なさや出会いから生まれる希望といった機微を表しているようにも聴くことができる。

#3 / piece of life (socond piece)

前向きさや強さを感じられる躍動感溢れるダンスチューン。グイグイと押し出し感の強いベースラインが心地よい。ライブでは間奏部の佐藤乃々子から始まるダンスパートが印象的で、自信に満ち溢れた表情で力強くも軽やかに踊る姿は見ていて非常に気持ちが良く、この楽曲を実に表現している。アルバム発表当時、メンバーがリアルタイムで大人に向かって成長していく中で、自身の力で進んで成長していく「意志」のようなものを感じられたのを思い出す。

#4 / フレンド・オブ・マイン

鈴木恵氏による楽曲提供。印象的なギターアルペジオで始まるイントロ、ミドルテンポのネオアコスのバンドサウンドに小編成プラスが彩りを添える。気のおけない友人と過ごした何気ない日常、海の風、その一つ一つは大した事ではないのかもしれないが、それ自体が貴重で輝かしいものであったのかもしれない、と思わせてくれる優しい一曲だ。RYUTistメンバー達の人間性や関係性もクロスオーバーして、より尊く美しく感じてしまう。

#5 / 海岸ROADでオトナツTunes!

まづカワイイ。楽曲提供はバラエティソングにも定評のある作曲家カンケ氏、作詞は松本武史氏。思春期お年頃女子達のみんなで海にお出かけドライブ嬉し恥ずかしキャッホーソングだ!! 恋も遊びもお食事もぜーんぶ楽しみたい彼女たちの気分を軽快なサーフサウンドに乗せて楽しめる快作。なんともほんわかした気持ちになれるので、国民のお茶の間アニメ感すら感じられる。曲終わりにテキトーそうなわちゃわちゃしたセリフ有り。むうたん(五十嵐夢羽)はどうなったのだろう…。

#6 / 日曜日のサマートレイン

so nice鎌倉克行氏による楽曲提供で、太陽のように明るいザ・シティポップ。イントロから聴けるギターのカッティングが小気味よく気持ち良い。夏の野外フェス等のイベントではよく披露され、会場を温めるのに最適な楽曲。元々はso nice用に書かれた曲とのことで、第一回日本海タ日ラインフェスティバルではso niceもセルフカバー、元シュガー・ベイプの村松邦男氏もギターで参加しライブを盛り上げた。

#7 / 日本海タ日ステーション

アルバム全体の中間地点となるインターラード。「日本海タ日ステーション」もまた上越市に実在する道の駅である。各種サブスク配信には入っておらず、CDでのみ聴くことができる。波打ち際にはしゃぐ4人の声が収録されており、大変ほほえましい32秒間。かと思いきや、最後に意味深な言葉が…。

#8 / ふたりのタ日ライン

楽曲提供は平川雄一氏(The Pen Friend Club)。まづ一聴してまるで古い洋画のワンシーンを切り取ったような印象を覚えた。クリアでハイファイな映像ではないが、そこには確かにふたりの太陽や海の煌めき、歓びが閉じ込められている。ビーチボーイズ等をバックボーンに持つ平川氏のサウンド感と、RYUTistの素直な歌との親和性は今までになかった発見で、新たなRYUTistの一面を開拓した楽曲だ。

#9 / Sunset ガール

大石若奈(わっかー)が卒業し、新たに横山実都が新メンバーとして加入する事が発表されたタイミングの特報動画で使われていたのが初出しだったと記憶している。壮大なオーケストレーションに永井ルイ氏のコーラスワークが加わった新生RYUTistを感じさせるゴージャスポップス。新たな始まりを予感させるには十分な楽曲で、期待を膨らませてRYUTistを見ていた思い出がある。

#10 / Blue

透明感のあるコーラスワークやサウンド、別れを想起させる歌詞も相まってとてもセンチメンタルになってしまう楽曲である。さらっと聴いてると特に気付かないのだが、実は歌メロディの音域がほぼ1オクターブで収まっているのが特徴的。近年の女性が歌うポップスでは「1オクターブ+1音半」～「1オクターブ+4音」程度で音域幅が設定されている事が多く、その方がインパクトを持たせやすかったり、ドラマチックな展開に持っていきやすかったりするのだが、この楽曲ではその必要性を全く感じさせずしっかりと世界観を構築。作曲家KOJI oba氏のメロセンス、バランス感覚が炸裂した楽曲であると言えるだろう。

#11 / 金色の海と七色のDays

本アルバムの実質ラストを飾るこの楽曲。永井氏の織り上げるような楽器アレンジとコーラスワークが美しい。ライブでは、RYUTistのどこまでも柔らかに優しい歌とダンスが聴くものに見るものに寄り添い包み込む。そこに新潟アーティストスクール生達のコーラスも加わり、一種の浄化を体感できる楽曲。様々な色を内包した「海」「金色の海」もまたそうであるように、様々なストーリー、感情に寄り添い包んでくれたり、または見るものを映し出すような、そんな存在なのかもしれない。

#12 / おやすみ - ルート402

ほとんどが1曲目の「おはよう - ルート113」と同じ構成だが、ハミングの前に微かな笑い声が聴こえる点、最後の波の音が少し長い点などが異なる。国道402号線は国道113号線に続き、新潟県柏崎市まで続く日本海夕日ラインの一部。新潟の海岸線を下越・中越・上越と南下しながら1日を感じるコンセプトアルバム『日本海夕日ライン』はここで完結する。



柳都 芸妓

RYUTO GEIGI



#1 / 柳の都

「パパパ」のスカットと「ふ」「る」「ま」「ち」と発声のハミングで構成される本作の導入曲。往年のテレビ番組などを彷彿とさせるようなレトロモダンな印象も受ける。グループ名の由来にもある「柳都」とは活動拠点新潟市古町がかつて堀端の柳並木の景観が見事だったことによる昔の通称。前作が新潟の海岸線モチーフだったのに対し、今作は歴史あるホームグラウンドの古町を舞台に掘り下げる。明治初頭の開港を機に花街として繁栄し、訪れる人々を芸でもてなした芸妓文化を自身の活動もその末端として受け継ぐものと解釈し制作されたご当地アイドルとしての矜持にして3rdコンセプトアルバム『柳都芸妓』ここに開幕。

#2 / 夢見る花小路

ソロプロジェクトplantarや定住している佐渡市で手掛ける婦人倶楽部などで活躍するムッシュレモンこと佐藤望提供。ストリングスの効いたアレンジと明るく爽やかな歌唱がおしゃれで心地良い。また後に『水硝子』などを提供する君島大空もギターで参加。古町は1~13番町までの古町通と並んで伸びる西堀通、東堀通、などの通りとそこにアミダのように交わる大小多数の小路で構成され、歌詞に出てくる小路ひとつひとつ名前と由来があり、当時の風情が感ぜられる。またPENGUIN DISC所属を機に待望のMVも公開。浴衣姿のメンバーは清涼感があり可憐で愛らしい。小路の名前を歌いながら街をゆくメンバーにさながら道案内をしてもらっている気分。ジャケット裏にはアルバム制作にあたって取材の際に出会った大正時代の古地図が掲載されている。こちらも眺めながらどうぞ。

#3 / 想い出はブローグ

作曲so nice鎌倉克行、編曲カンパスの小川タカシとホーンアレンジに鈴木恵、作詞はお馴染みNOBEという連合チーム。指2本を足に見立ててテクテク歩かせる振り付けが印象に残る切ないギターポップ。Aメロが音数控えた4小節ずつのソロパートでメンバーの歌声の個性が味わえ、サビで混ざり合うユニゾンが引き立つ。部分的にハモ、落ちサビもリレー形式でソロなのがエモい。街で見かけた旧友にあの頃との移ろいを感じ胸の中でエールを送るといった内容だが、全メンバーが卒業となった今、また一味胸に去来するものがある。ライブでは曲の最後にサイレントで、とあるメッセージが発せられている。

#4 / サンディー

波間にキラキラ反射する夕日の光を思わせるようなギターと郷愁を誘うホーン。2×2の輪唱のような掛け合いから美しく厚みのあるハーモニーが素晴らしい。様々な側面があるRYUTistのヴォーカルコーラスグループとしての真骨頂が発揮された一曲。スタンドマイクで披露されることが多く、ヨコ揺れと手振り中心の振り付けもコーラsgal的。提供は2ndから続投の鈴木恵。2016.10の鈴木恵TRIOレコ発ツアーにRYUTistがゲスト出演した際が初演でアルバム収録曲の中でこの曲が最も早く発表されている。サビの1番2番のハモリに対して間奏後落ちサビから「これからずっとずっとこの街で…」のほうはソロパートとユニゾンに置き換わっていて前向きな決意を表現している。余韻がまた素晴らしい。

#5 / 古町ブギウギ通り

#3#4のしっとり感から一転し軽快なサクソソロとフィンガースナップで始まるビッグバンドジャズ風ナンバー。提供は新潟県内でロックジャズソウル等をバックボーンに持つミュージシャンが集結し20年以上活躍する腕利き集団マンダムズ。作詞作曲はリーダーのバルカン坂爪、演奏コーラスもマンダムズが担当。常に飛び跳ねているような運動量の激しいダンスでステージ狭しとパフォーマンスするメンバーは毎回笑顔で楽しそうだった。間奏では魅せ場のソロダンスパートもあり歓声に包まれる。歌詞にもジャズにまつわるワードが多いのと「GET IT GIG(芸妓)」のもじりがあったり、「古町どんどん行くよ」は言わずもがな古町通商店街の恒例イベント古町どんどんとかかっている。

#6 / NEO 古町小唄

週末のステージ出演で「御座敷」と重ね現代のアイドル活動と昔の駆け出しの若い芸妓さんに扮するメンバーがまるでタイムリープで行き来しているようなユニークで楽しい1曲。(色っぽく)「なれるかな?」のセリフに対して他が手(ナイナイ!)と茶化していたり、間奏に差し掛かるところで「はい、間奏!」と言っていたりアルプス一万尺的な手遊びが入ったり、突如、都々逸的な歌詞が出てきたりと盛りだくさん。歌詞の「樽が響きゃ」の樽とは「樽砧」という醬油樽や酒樽を木槌で叩く新潟独自のパーカッション文化。終盤「時を超えて〜受け継ぐひとひら」ときてアルバムタイトル回収を担い、最後はステージに着座し「チントンシャン、じゃん♪」で座礼にて締めくくる。作曲詞は重鎮カンケ/松本武史のタッグ。リリース時カンケ氏がSNSで引用していたのが1980年浅野ゆう子『セクシー・バス・ストップ』オマージュはこの他にも…?

#7 / 涙のイエスタデイ

再登場バルカン坂爪&マンダムズ提供。こちらはアーバンなフリーソウルディスコ。落ち着いた大人びた歌い出しやステップがクールで格好良く、歌詞も切なくロマンティック。ダンスサブかつ華やかでライブ映えし、後年に渡ってセトリリストの一軍だった楽曲と記憶している。サビのファルセットでの歌唱とフルートの音色がまるで夜景の上空へ吸い込まれていくような上昇感はラストに転調を経て絶頂に登り詰める。またこの曲は後にマンダムズによるセルフカバーが自身のアルバムに収録されナタリー石田のセクシーな男性ボーカルでRYUTistはコーラスで参加。

#8 / わたしのこみち

The Pen Friend Club演奏、リーダー平川雄一作詞作曲。美しいコーラスが彩る持ち味のウエストコーストロックにのって「ようこそ!」と歌い出す。「古町→降る町」の表現は先達を踏襲。RYUTist自身のテーマ曲のようであり、「壊れるくらい 磨く 注ぐ」とやや苛烈なまでの歌詞があり、まるでスポ根のようでもあるが、様々な逸話があるRYUTistの練習量はまぎれもなくスポ根であったと思うし、「笑顔が見たいから」「また会いたいから」は誠心誠意だった。ソロパートに各メンバーの名前が織り込まれており、ここにオーディエンスからのコールが想定されている。このファン視線が嬉しかった。振り付けもガーリーで可愛い。ペンクラブ版セルフカバーがあり、歌詞とタイトルも「まばたき」と別のものになっている。

#9 / 恋してマーマレード

だっだっだーだっだっだー♪の三連符はシューブリームス『恋はあせらず』等を思わせるモータウンビート Bメロ「chu〜chu〜」のコーラスや「トリ」のハーモニー、表情や仕草、アイドル的な表現がハイパー可愛い。おすすめはCメロで人差し指をクイッと「ねえ はにー」ここ、ひらがなののである。好き。目線でも貰えたらメルトダウン必至。気分が落ち込んだり、なんだかうまいかないときのキミに魔法を…作編曲は#1柳の都も同じく「大先生」永井ルイ 作詞ACKO この曲には大変甘やかしていただきました…明日もがんばろう世界を回そう。

#10 / 口笛吹いて

本アルバム最終曲にしてRYUTistの特にアンセムと呼べるもののひとつ。ライブでもセットの終盤や節目の機会に披露されることが多かった。見慣れた街の景色も永遠では無く、始まることと終わること、良い時もそうでない時も、気づいたり忘れたり思い出したりして人生は続く。この曲のアーカイブの映像はどれも大団円と呼ぶに相応しい光景だけれども、やっぱり古町どんどん7番町の大観衆に囲まれた景色が一番思い出に残っている。作編曲KOJI oba 作詞NOBE 歌詞中や振り付けにもフィーチャーされている猫、古町の小路には実際に猫が多く、散策すると高確率で遭遇する。以上で全曲紹介終了。RYUTistを愛するすべてのひとに希望溢れる未来が訪れますように…ばっばはーい



ファルセット Falsetto



#1 / GIRLS

RYUTistの4thアルバム『ファルセット』のオーバーチュア。メンバーの4人のスキットから始まり、蓮沼執太フィルのバリエーション豊かなサウンドがアルバムの幕開けを告げる。2曲目『ALIVE』のイントロと間奏にも登場する変則的かつ軽やかなシンコペーションのクラブが印象的。ライブ会場での観客のクラブがいつまでも揃わないというのまた良い思い出。

#2 / ALIVE

4人の澄んだ歌声や中盤のセリフパート、『GIRLS』に引き続き蓮沼執太フィルの演奏で、人間と自然の営みが交錯するような清々しい朝の情景を描いている。毎日積み重なるいつもと変わらない朝を迎える喜びの中にも、どこか特別な一日が始まるような期待、決意、不安、希望といった繊細な情緒が感じられる一曲。

#3 / きっと、はじまりの季節

明るいピアノフレーズと確かな足取りが感じられるビートで始まり、一気に視界が開けるような高らかな歌声が光るサビに繋がる構成には、新たな世界へ漕ぎ出すときの不安と希望が感じられるよう。弓木英梨乃氏のエモーショナルなギターソロもポイント。3人の卒業が発表された2024年9月から12月のラストライブまでの期間「ありがとねほんとにねseason」を象徴する曲のひとつとしても歌われていた。

#4 / ナイスポーズ

今や"公式お姉ちゃん"である柴田聡子氏がはじめてRYUTistに提供した楽曲。みくちゃんの「ナイスポーズ」が見られるシングル盤のジャケットも必見。子どもと大人の狭間にある心の変化、それに伴う他者とのすれ違いやその中で育つ愛情といった青春の機微が描かれている。優しく切ないストリングスと、のんのの低音が光る広い音域のメロディがノスタルジーを演出している。

#5 / 好きだよ…

RYUTist初期から名曲を生んできた作詞NOBE氏・作曲KOJI oba氏のコンビによる、女の子の叶わない恋心を歌った曲。繊細な表現の美しさが散りばめられたこのアルバムの中で、ストレートかつエモーショナルな「好きだよ…」というメッセージにハッとさせられたリスナーも多いのでは。ともちいの歌うCメロ「言いたくないけど～」のパートを聴けば、その爆発するような表現力に心を打たれること間違いなし。

#6 / センシティブサイン

シンリズム氏による繊細な響きのアルペジオから始まり、一音一音を丁寧に配置していくようなメンバーの柔らかな歌声が乗っていく。純粋であたたかな歌いぶりには、新潟古町というローカルな場所でまっすぐに音楽へ向き合ってきたからこそその人間味が感じられる。そんな4人の姿も掛け合わせ、人生の目印となる明かりを灯して未来へ導いてくれるような優しい楽曲である。MVにはシングルのジャケットにも使われた内野西が丘駅やお馴染みの萬代橋、白山公園や朱鷺メッセなど、新潟の空気を感じられる場所が登場する。

#7 / 絶対に絶対に絶対にGO!

走り出したくなるような疾走感が聴く者を自然と笑顔にするようなこの曲は、RYUTistとしては珍しく曲のほとんどが2ビートで構成されている。間奏の「Wowow～」やサビ終わりの「yay!」など、無邪気で若いエネルギーに満ちた楽しい曲。そんな明るいノリ(音楽的にも雰囲気的にも)に添えられた、北川勝利氏ならではの透き通るようなストリングスアレンジが爽やかなアクセントになっている。ライブでは振りコビが楽しいキャッチーなダンスで会場全体の雰囲気はさらに明るくなる。

#8 / 青空シグナル

エキサイティングで手数の多いドラムと沖井礼二氏のベースが導く演奏に、まさに青空に投げかけるような伸びやかな歌声が響く。サビの要所要所で挟まる短いソロパート(最初のサビでの「振りほどいて」「湧き上がるよな」など)では、4人それぞれの歌声の個性と魅力がコンパクトながら存分に発揮されている。このアルバムに収録されている曲の中では一番初めにシングルとしてリリースされており、アルバム全体の爽やかなイメージを象徴する楽曲のひとつでもある。

#9 / 時間だよ

四つ打ちやファンキーなカッティングギターのノリが気持ちいいダンスブルな楽曲。その曲調に加えて、女の子同士の恋愛が描かれた歌詞には、青春におけるあらゆる「揺らぎ」のようなものが感じ取られる。作詞作曲のKan Sano氏は曲の制作に際し、RYUTistを深く知るためにメンバーと個別に電話をしてパーソナリティの理解に繋がったとのこと。「予想を軽く超えてくミステリー～」の部分は読書家であるともちいあつての歌詞となった。

#10 / 無重力ファンタジア

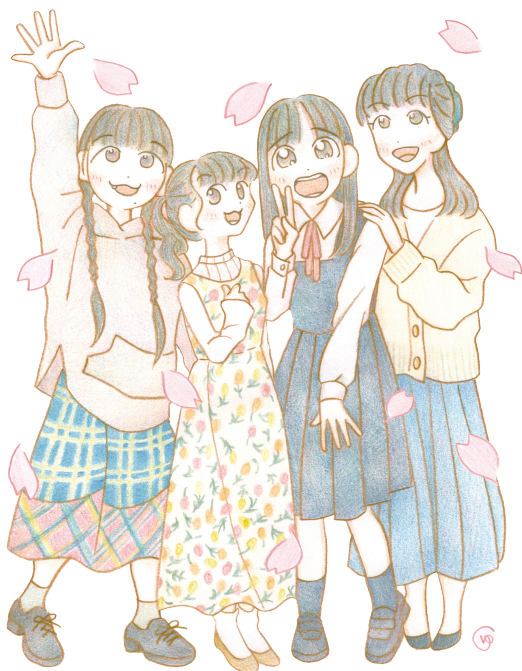
4人の美しいハーモニーや切なさを帯びた歌声、フロアの底から身体に響くような低音域の鳴りが、果てしない宇宙を感じるような歌詞の世界観を全身に浴びせてくれる。ライブではメンバーの流れるようなフォーメーション展開としなやかなダンスも相まって、まさに無重力といった雰囲気を感じられる。作曲したインドネシアのシティポップバンドIkkubaruや作詞を担当した清浦夏実氏は、セルフカバーといった形でそれぞれ同楽曲をリリースしている。

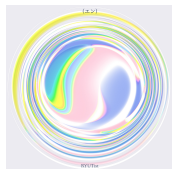
#11 / 春にゆびきり

パソコン音楽クラブの作詞作曲による、印象的なシンセリフから始まる楽曲。アルバム『ファルセット』のリリースは2020年7月14日だが、当初は同年の5月5日のリリースが予定されていた。しかし新型コロナウイルスの感染拡大と緊急事態宣言の発令により、アルバムの発売も延期に。それまで続けていたHOME LIVEもなくなったRYUTistやファンにとってこの悲しみは大きなものだったが、そんな発売延期の発表と併せて4月19日に先行配信されたのがこの『春にゆびきり』である。人と人とが離ればなれになる悲しみを支えた「ゆびきり」が、制作当初は思いもなかった意味を持って、アルバム全体にさらなる深みをもたらした。

#12 / 黄昏のダイアリー

むうたんが歌う落ちメロの「夜明け待つ流星」のパートが聴きどころのひとつ。レコーディングでは北川氏・沖井氏のディレクションのもと、当初は裏声でしっとり歌い上げる予定だったが、様々な偶然が重なり、急速地声で強く歌うことに。むうたんのどこまでも届きそうな伸びのある歌声はライブでも数々の感動を生み、コアなファン以外にも広く愛される楽曲となった。ここまで歌われてきた青春の日記を回想しながらついに次の新たな一歩を踏み出すその瞬間、大人びた裏声(ファルセット)よりも等身大の自分の歴史が詰まった地声が背中を押す…、なんてことを考えてしまうほど、RYUTistの生身の表現力に満ちている。





#1 / 支度

アルバム『(エン)』の幕開けを飾る君島大空さんによる一曲。その名の通り新たな物語の“支度”を象徴する曲。アルバム発売後の結成11年秋冬ツアー【(エン)】では、メンバー登場時の#0として使用され、アルバムとライブのはじまりを祝福した。

アイドルポップの枠を超え、J-Pop史に燦然と輝く本作の序章を担う。

#2 / 朝の惑星

#1に続き、本作も作詞・作曲が君島大空さん。それぞれの朝に向け「朝、満員電車の中、少し憂鬱だけどがんばろう」というイメージで作られたという。浮遊感のあるメロディに目を覚ますようなソリッドなリズムが共存し、夢と現実の狭間にあるような優しくも凛とした朝の空気を思わせる。ライブではメンバーのダンスが縦横無尽に交差し、その動きが楽曲の持つ解放感をさらに際立たせている。

#3 / うらざりもの

作編曲：石若駿さん、作詞：没 a.k.a NGSさん。4分半足らずの楽曲の中で転調を繰り返し万華鏡のように色とりどりの情景が広がる、まるで組曲のような構成。歌詞が「かつて魔法使いだった主人公」の物語を想起させ、ツアー時に使用された魔法少女のような『(エン)』の衣装デザインとも呼応しているようにも感じる。ライブにてメンバーが横一列に並び「I'm a dreamer.....」と繰り返し詠唱するシーンはポエトリー・リーディングのようで詩的で幻想的な圧巻のパフォーマンス。

#4 / オーロラ

RYUTistの4人がアラスカまでオーロラを見に行く物語を描いた楽曲。『ナイスポーズ』に続く、柴田聡子さんによる2曲目の提供曲。MIXはDub Master Xさん。Dubのグルーブに乗せ一歩ずつ踏みしめるように旅路を進む。“あれがオーロラ”で最高潮に達する。ツアー【(エン)】のパフォーマンスでは曲の最後に4人がステージ背景の中央に飾られたアルバムジャケットのアートワークをオーロラに見立て眺める演出も。2023年4月1日の「古町前夜祭」ではコロナ禍で約2年間禁止されていた「声出し」が解禁されたなかで披露された。初めての声出しにも関わらず、オーディエンスの“すごーい……”“さむーい……”という掛け声がびったり揃う一体感に包まれた。また同日、ゲストの柴田聡子さんが弾き語りて全パートを一人で歌い上げる演奏も息をのむ素晴らしさであった。

この曲は、FM新潟「東港線もどかしルーム」にもたびたび出演された北海道西興部村でゲストハウスを運営する浅野和さんが経験されたアラスカまでのアメリカ縦断の話がもとになって生まれたという。プロデューサーがその話に「希望」を感じ、その想いがテーマとなり制作された。アルバムのタイトルを「オーロラ」とする案もあったらしい。ヴォーカル・レコーディング時には、事前に歌割りを決めず、全員が全パートとハモリを録音。その素材を編集し4人の声を組み合わせる手法で構築されたとのこと。つまり、例えば「全編、宇野友恵さんが歌唱したバージョン」も存在するらしい。いつか聴ける日を渴望している。

#5 / しるし

パソコン音楽クラブによる提供曲。穏やかで透明感のあるバラード調メロディが、アルバムのなかでもひと際心落ち着く息継ぎのような時間をもたらす。本作の歌詞を「夜明けを待っていた世界に朝の光が差し込み、ようやく歩み始めることができる」と解釈すると、発表当時の世相「コロナ禍の制限が緩和し、人々の活動が再び広がりつつある状況」とも重なる。この世界観は、『春にゆびきり』（パソコン音楽クラブによる提供曲の前作）へのアンサーとも感じる。この世相のなか行われたツアー【(エン)】のパフォーマンスにおいても、メンバー間の絆を確かめ合うようにワンフレーズずつ歌をつないでいく冒頭の歌唱パートがとくに胸に響いた。

#6 / 水硝子

『(エン)』の中で最も早く録音・リリースされた曲。君島大空さんによる作詞・作曲で、RYUTistへの提供曲としては第1作目となる。繊細なギターの旋律と透き通るようなヴォーカルが絡み合い、楽曲全体に揺らぎのある美しさを生み出している。ライブではしなやかなダンスとともに披露され、音と動きが融合する至高のパフォーマンスを魅せる。2024年10月20日、新宿MARZで行われた対バンイベント「RYUTistと君島大空」では、君島大空によるソロのセルフカバーと、RYUTistとのコラボレーションの2形態が披露された。映像化を熱望している。

#7 / たったいまさっきまで

ウ山あまねさん節とも言える、破裂音や電子音が散りばめられたラウド・サウンドのトラック。それでいてノイズに傾倒せず心地よい音色にまとめ上げる手腕は神技。ラストのRYUTist4人によるユニゾンの合唱が、圧倒的なカタルシスを生む。この曲の爽快感がお好きな方はもうひとつのRYUTist×ウ山あまね作品である『mizugarasu-ウ山あまねremix-』(シングル「水硝子」に収録)も必聴。

#8 / PASSPort

『ALIVE』に続く蓮沼執太さんによる提供曲。ハウス・ミュージックのような骨太な4つ打ちビートが全編を支配する中に、ホーンが柔らかなハーモニーを作る。ダンス・ミュージックにヒーリング・ミュージックが同居するような心地よさは永遠に終わってほしくないと思えるほど。歌詞は「架空のニューヨーク旅行」をテーマに、RYUTistの4人がLINEグループで「ニューヨークへ1週間旅行するとしたら何をしたいか」をやり取りした内容をもとに作られている。間奏のボイスパーカッションは、レコーディング中「誰かボーパできる？」と振られた4人がじゃんけんをし、勝った横山実郁さんが担当することになったとか。『RYUTist ACOUSTIC LIVE』に収録のライブバージョンもヴォーカルの美しさが際立っている。

#9 / 逃避行

『(エン)』の最後を飾る楽曲。作詞・作曲はermhoiさん。「大人であっても、ときにはつまずくことがある。現実と戦うための鎧を脱ぎ捨て、生身のまま夢の世界へと逃れることもひとつの強さ」と教えてくれるような歌詞が癒しのように胸に響く。ライブにおいてメンバーそれぞれがソロ、あるいは2人1組のユニゾンで朗々と歌い上げる様は成熟した大人の艶っぽさを感じさせる。アルバムでループ再生すると、この曲の後に夢から現実へと戻り、再び日常を歩むための『支度』(#1)へと繋がる構成も見事。(エン)とは、日々を循環する『円(エン)』にもつながることばなのかもしれない。



RYUTist 2023-2024



#1 / WOOT!

クラブで始まるのが印象的なRYUTist史上もっともポジティブチューン!? 柴田聡子さんとメンバー3人と共に練った歌詞には「みく」びらないで、「と」められないの「も」うこれ以上、「む」我夢ちゅ「う」、と3人の名前がさりげなく組み込まれているのも嬉しいポイント。ポジティブな気持ちをここまで純度高く歌い上げられる3人と、完成後の飛距離をわかって作った柴田さんのソングライティングには脱帽。「行こうよ! もっと! 行こうよ!」なんてシンプルで突き抜けた歌詞だろう。2024年のRYUTist3人時代を象徴する一曲。渾身のワンカットMVをみかっぴろげて見ろ!

#2 / 流石

いつになく、みずみずしいイントロで始まる君島大空さんによる提供曲。支度 / 朝の惑星 / 水硝子につづき、君島大空×RYUTistの三者様の歌声が混ざり合う、ひとつの答えといっても良いかもしれない。体感温度という歌詞から感じられる涼しげな雰囲気包まれた曲。2曲目にして、2023-2024というアルバムが(エン)の雰囲気を保ちながら、RYUTistがネクストレベルへと、到達したことを伝えてくれる。25年にリリースされた『音のする部屋』ではノイズが暴れるファジーな世界を展開していた君島さんがRYUTistにだけ見せる表情かのような一曲。仮歌では君島歌唱ver.をみなさん聞いたそうです。

#3 / echo

『春風烈歌』のCDのカップリング曲であり、これまでRYUTistに名曲を贈ってきたKOJI obaさんによる楽曲。「さくら」「水」「蕾」といった春や芽吹きをイメージする言葉が連なり、「光る朝」というフレーズも彼女たちにぴったり。春風という名のツアーを組んだだけあって、この曲もまた「春の歌」である。穏やかでシンプルなキックで始まるトラック。3人の歌声とともに加速する後半では、充実したホーンやカッティングの音が心地よい。歌詞にある「愛しいあなたね 10年後も笑えますように」を深読みするファンが多発…。「笑顔でさよなら」を銘打った#ありがとうとねほんとにねシーズンを駆け抜けた彼女たちに添えられた、エンドロールのようにも聞こえる一曲。

#4 / 君の胸に、Gunshot

D.A.N. 櫻木大悟さんによる提供曲、弾丸の装填音から始まる不穏さをまといながら、エレクトロビートとともに加速していく。RYUTistには珍しくダークで踊れるこの曲。聞けば聞くほど「あなた」を想う歌だということがわかる。かわいらしい「Wicked!」という歌詞もクールに歌いこなす3人。ライブで披露することが少なかった貴重な楽曲でもあるが、みくんち@MARZではコッパーさんと圧巻のパフォーマンスを披露。2024年のやっついフェスではこの曲で幕開けしたという話も…と、こぞで魅せる一曲。この曲を機にTikTokを開設したが、メンバーの肌に合わなかったのかなんとか…。

#5 / 薄明光線

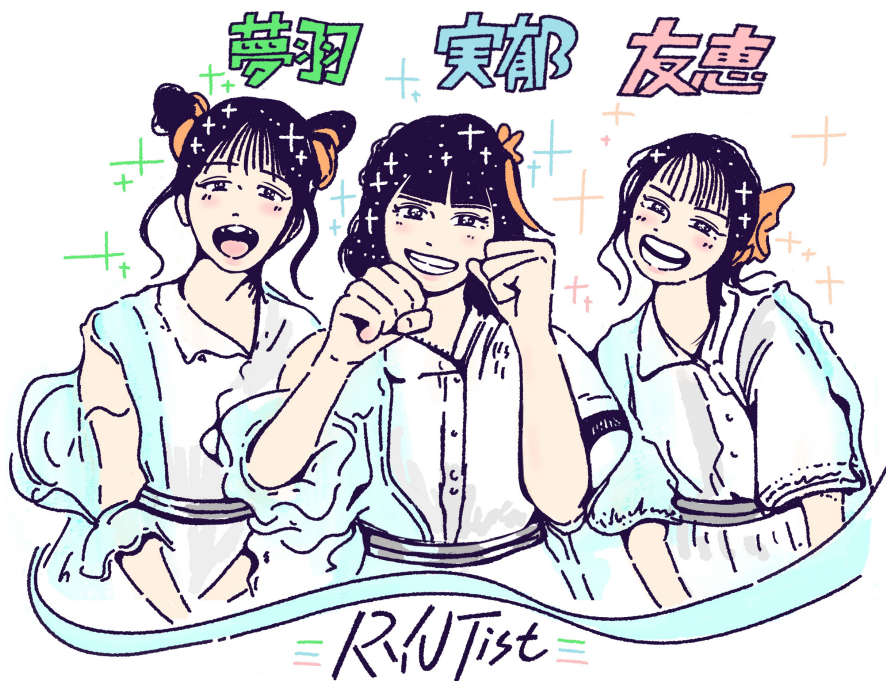
(エン)で一度完成したかと思われたRYUTistの世界が、イントロから破壊され再構築されたかのような衝撃!『うらぎりのもの』を作曲提供した石若駿さん / 作詞は音楽家、打楽器奏者として活動される角銅真実さん。リリース後の横山さんのインスタライブによると難解な歌入れ!に恐れつつ、全員歌入れしたのちに、完成されたそう。インプロビゼーションの雰囲気を漂わせるジャズ×フュージョンに3人の歌声が楽器よろしく混ざっていく様は、ライブがあったとすれば、…のように披露されたのだろう。伝説の曲となるのか!? 終盤に繰り返される「るすえんらぶれちあ」はスペイン語で「隙間の光」である。

#6 / 春風烈歌

季節を歌うことの多いRYUTistが、曽我部恵一さんの提供により新たに春の歌を歌い上げた。サニーデイ・サービスの『春の風』とイントロが似ているのは、気のせいではないはず！ロックナンバーの中でも泣きのミドルチューン。バンドサウンドとアイドルの魅力が融合し、春の別れと出会い、終わりと始まりを春の風に寄せた一曲。ライブ終盤に披露される際、「Everybody, sing & shout!」の煽りに呼応するファンの声。ツアーを経て迎えたラストライブでは、大合唱が起こる。最後の振りで、3人の指先が風に乗る様子がセンチメンタルで印象的。

#7 / Unknown Us

卒業発表後のラストライブで披露された、柴田聡子さん提供の「新」曲。いわゆる卒業ソング？ どうも、それだけではない。いまや日本を代表するシンガーソングライター、ディーバ、いや…“さとねえ”が彩ってくれたことによる圧倒的な信頼感。2024年2月に柴田さんがリリースした『Your Favorite Things』が好評を博す中、RYUTistの歩みとファンの歩みが結実したかのような一曲！「かなしいことはきみに覚えてもらおう たのしいことはわたしが覚えてるから」「きみ」と「わたし」——この無限の代入可能性を持つフレーズに、新潟・古町の景色と彼女たちの姿をいつでも思い出せることを、我々は“知っている”。この曲の持つきらめきとまぶしさ。そして、RYUTistの楽曲は永遠なのだと心から思える。



あとがき

文章部

りおん

皆様のお力添えを頂きこの様な素晴らしいライナーノーツを作成する事ができました、本当に心から感謝申し上げます。一人でも多くの方に彼女たちの歌声が響き渡りますように。

クマロボ

2014年8月2日、東京では某大型アイドルフェスが開催されていたのだが、僕は新潟へ向かっていた。初HOMEライブである。当時スマホを持ち合わせていなかったのも、古町の地図や旅のしお리를持参し、あらゆる事にドキドキしながら会場入り。ひんやりとした空気、やや少なめの客入り、だが神イベであった。ライブ、特典会、オタさん達との初めての交流。アイドルさんをこんなに大好きになることなんてなかった。そして最後にはこんな素敵な企画にも。RYUTistに、そして、すべての出会いに感謝します!!

ふりずの

ラストのクワトロからもう四半世紀が過ぎようとしています、いえしていません。なんかそれくらいの気分であり、熱量の昨年末ではありました。サポートでweb会議に出てくれというのでそんな軽い気持ちでしたがなりゆきでアルバム1枚任せられました。とにかく恐縮至極、敬称略だし…でもおかげで改めて楽曲に向き合える良い機会でした。聴き、語り継がれる限りRYUTistは不滅。なにかの一助となれば嬉しいです。これからも酔ってる！乾杯！

ウメキサキョウ

素敵な企画に寄稿させていただき本当にありがたい限りです。16方位全てに感謝の意を表したいのに下げる頭が足りなくて困っています。とにかく僕はむうたんから頂戴した”わんぱく31号”の称号を胸に、これからもRYUTistの音楽と共に生きていきたいと思います。関わってくれた皆さま、柳都アーティストファーム様、そして大好きなむうたん、ともちい、みくちゃん、他にもたくさん、ありがとね、ほんとにね。

きりやま

RYUTistとの出会いは『ナイスポーズ』です。柴田聡子さんの曲目当てで聴き始めたはずが、気づけばRYUTistの大ファンになっていました。今では日常にRYUTistの音楽がないことは、想像もできません。また、ファンの皆さんと出会えたことも大切な財産。同じ時代に仲間と喜びを分かち合えることは、何にもかえがたい幸せです。これからの人生もRYUTistがつないでくれた縁と共に歩んでいきたいと思います。

RYUTist だいすきアート部

亀井桃

RYUTist、RYUTistファンもう皆様と出会えて時間や優しい気持ちを共にできたこと、心から大切に思っております。
たくさん絵に込めてきました。そして、これからも絵に残していけたら、と！ありがとうございました。

さか

11年前出会った口数の少ない新潟のお嬢さん達。そこからそれぞれが努力を重ね、個性を磨き、放つ輝きに惹かれ続けて宝物のような思い出がたくさんできました。新潟に足を運び、土地の良さを知れたのもRYUTistさんのおかげです。そして出会いの中で、このような企画にご縁をいただけたこと、本当に光栄に思います。わたしの人生に色んな彩りをくれたRYUTistさんに出逢えて良かった。ありがとね、ほんとにね。

ゆったり

RYUTistの絵を描き始めたのは、乃々子さんの卒業公演が間近と迫ったころ、RYUTistへの応援の想いを形にして伝えなかったからでした。今日このような企画に参加する機会をいただけたのは、本当に幸せなことです。私にとってRYUTistの絵を描くことは、お手紙をしたためるのと同じくらい、とても大切に愛しい時間でした。RYUTistの代わりはこれからも何一つとしてありません。ありがとうございました。

もちゃんそのもの

はじめて楽曲を聴いて衝撃を受けたこと、はじめてMVを見て春のようだったこと、はじめてライブに行ってきたことに触れられたこと、はじめて新潟に行って大はしゃぎしたこと！RYUTistさんからはたくさんの初めての経験をもらいました。これからも大好きです！素敵な企画にお誘いいただきありがとうございました！

ひやま

コロナ禍で出会った日から、ずっと心の支えになってくれたRYUTist。感謝してもしきれません。ファンとして応援した日々の中で、少しでも恩返し出来ていたのだろうかとも今でも考えます。メンバーは卒業してしまったけれど、自分たちの存在がたくさんの人を照らしていたことをずっと忘れないで欲しいです。大好きなRYUTist。みんなの未来に、どうか光あるように！

杉山

短い間でしたが、自分はRYUTistに出会うべくして出会ったと思います。鮮やかな楽曲はもちろんのこと、メンバーの真摯で愛嬌のある魂と新潟・古町への愛、合わせ鏡であるファンのみなさんに出会えたことを誇りに思います。中でもアート部は大事な居場所でもありました。RYUTistに出会ってから芽生えた気持ち、過ごした時間、全てを抱きしめてこれからも生きていきます。そして…また会える日が訪れることを信じています！

表紙扉絵 アート部: 亀井桃

挨拶文: りおん

RYUTist HOME LIVE 文章部: ジェニー / アート部: さか

日本海夕日ライン 文章部: クマロボ / アート部: ひやま

柳都芸妓 文章部: ふりずの / アート部: ゆったり

ファルセット 文章部: ウメキサキョウ / アート部: ゆったり

(エン) 文章部: きりやま / アート部: もちゃんそのもの

RYUTist 2023-2024 文章部: 杉山 / アート部: 杉山

総合監修: りおん / デザイン監修: 杉山

2025.4.30

RYUTistよ、響け。



ありがとね、ほんとにね。